

小・中学生が持つ教科別学習観の構造

鈴木 豪(横浜商科大学大学 商学部 講師)

研究の背景

日本の子どもが、非定型的課題を定型的課題に比して苦手としている背景の一つとして、子どもたちが、「学習は知識の暗記や再生である」という学習に対する信念(学習観)を持っているために、深い理解が阻害されている可能性が指摘されている(e.g., 藤村, 2012)。子どもたちは、「社会は暗記教科だが、理科はそうではない」というような個別の学習観を持っている可能性が考えられる。その一方で、学習観を同じ学校の中で学習をしている個人内の変数であると捉えると、学習一般に関する学習観がそれぞれの教科の学習観を規定し、個人内では学習観が一貫している可能性も考えられる。これまでの研究では、いずれの見方が妥当なのかは、十分に明らかにされていないと考えられる。

研究の目的

本研究の第一の目的は、日本の子ども特に小・中学生が持つ教科ごとの学習観について検討し、教科ごとの学習観の関連・構造を検討することである。第二の目的は、教科別の学習観について、学校段階、学年間で違いが見られるのか、見られるとしたらどのような差異であるかを検討することである。また、補足的に、複数の教科の要素が含まれると考えられる記述式課題を一部の学年で実施し、学習観との関連も検討する。

研究方法

静岡県内の公立A小学校、B小学校、C小学校の5・6年生および、A中学校、B中学校の1・2年生を対象とし、1学期、2学期、3学期の3度、質問紙調査を行った。質問紙は、鈴木(2013)の作成した学習観尺度のうち、意味理解志向学習観と暗記再生志向学習観の下位尺度から5項目ずつ採用し、「国語の学習では」などの文言を追加した。国語、社会、算数/数学、理科の4教科を対象とし、順序を学級ごとに無作為に入れ替えて実施した。

また、C小学校6年生のみ3学期に、餃子消費量を表す省略された棒グラフの読み取りに関する課題(餃子課題)、および2種類の温度の水を混ぜた後の温度に関する課題(温度課題)を実施した。

結果と考察

共分散構造分析を用いて、4教科の学習観をそれぞれ1次因子とした1次4因子モデルと、その上位に教科一般の学習観として2次因子を想定した2次因子モデルの比較を試みた。意味理解志向学習観については、両モデルとも許容できる程度の指標が得られたが、1次4因子モデルの方がやや指標が良かった。また、暗記再生志向学習観については、不適解となり、モデルの比較はできなかった。この不適解は、教科間の相関係数が大きいことが原因と考えられた。意味理解志向学習観についても中程度の正の相関がみられたことから、本研究で対象とした4教科の学習観は、学習一般の学習観を想定するほどの指標は得られなかった一方で、その得点の高低は一定程度、個人内で一貫していることが示唆された。一つの教科への学習観への介入が、他教科へ波及することが期待できる一方で、学習観を変容させるためには教科をまたいで共通したアプローチが必要であるとも考えられる。

その一方で、学期・教科間の得点差について学年ごとに検討したところ、社会、国語のいわゆる文系教科が、算数・数学、理科の理系教科に比べて、相対的に暗記再生志向学習観の得点が高い傾向にあった。しばしば日常的に言われる社会は暗記教科である、という学習観に対するイメージが本研究で問う学習観とも対応していることが示唆される。また、社会については、中学1年の3学期にかけて、中学2年では、社会も含めた教科全体的に暗記再生志向学習観の得点が増加していた。意味理解志向学習観については、中学1年生において1学期から2学期にかけて得点の低下が見られた。中学1~2年の段階が特に学習観の変容が大きく、学習指導において注意が必要であると考えられる。

学習観と課題解決との関連では、国語の意味理解志向学習観の得点が高いほど、温度課題で適切な回答ができる確率が高かった。文章題に書いてある状況を適切に想定して回答するために、国語の意味理解志向学習観が関連する可能性があることが示唆された。

学習観の変容の要因をインタビューや自由記述を用いて検討することや、他教科・他学年での状況を確認することが今後の課題である。

協同研究者：石橋優美(共立女子大学)、青柳尚朗(東京大学大学院)